

## ベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉：二人の自伝を読みかえして

ソシエ, マリオン  
国立東洋言語文化研究所

<https://doi.org/10.15017/16039>

---

出版情報 : Comparatio. 9, pp.1-8, 2005-07-20. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## ベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉

——二人の自伝を読みかえして——

マリオン・ソシエ

本日、こうして九州大学でお話ができることを大変名譽に思っております。招待を下された九州大学の西野先生と、協力して下さった福岡大学の大嶋先生に深くお礼を申し上げたい次第です。

私は何年も前から福澤諭吉に興味を持ってきましたが、本格的に勉強し始めたのは二十年近く前に『福翁自伝』を読んだ時からです。当時、幕末及び明治初期の日本人が懐いた危機感と冒険精神の風が吹き荒れているような作品として読んだのを覚えています。それに明治時代の知識人としての体験を、生き生きとしたスタイルで描いていることに感心しました。

以来、日本語教師としての仕事の傍ら、福澤に関する小研究を続けてまいりましたが、常に頭のどこかに『福翁自伝』を広くフランス人に読んでほしいという願いがあり、いつかフランス語に翻訳しなければならぬと考えていました。そして最近ようやく『福翁自伝』の仏訳に INALCO の同僚と一緒に取り掛かりました。

そこで『福翁自伝』を読みかえしているうちに、今まではあまり気に留めなかったことに目を向けざるをえなくなったのです。それは「アメリカ革命の精神」の影響に関することです。もちろん『学問之すゝめ』の冒頭に、福澤が書いた最も有名な文章「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という表現は、アメリカ独立宣言からのものであったことは知っておりましたが、それまでの私の関心はむしろ福澤の経済学・経済思想にあ

りましたので、それ以上深くアメリカ革命の精神の影響に目をむけませんでした。むしろ江戸時代の日本と当時の大国としてのアメリカとの出会いが印象的でした。ところが、『福翁自伝』を福澤の他の著書と一緒にもう一度読み直すと、そこにアメリカ建国に大きな役割を果たしたベンジャミン・フランクリンの影が浮かんできました。福澤は多くの文章の中でフランクリンについて述べたり、フランクリンの著書を引用したりしています。それで好奇心がわき、じっくりと『フランクリン自伝』を読んでみると、一世紀以上離れ、地理的にも大変離れたところで生まれた二人の間にいくつかの深い共通点があることに気がつきました。その共通点をそれぞれの自伝にそって、三種類に分け、今日の話を進めて行きたいと思いますが、それは生き方、考え方と書き方に関する共通点です。

生き方に関する共通点を調べていく上では、フランクリンの人生を見ながらそこへ福澤の体験からの光を当てたいと思います。二人の考え方を比べるのに両者の自伝の中に現れる根本的な考え方をまとめたと思います。それから書き方に関しては二人の自伝の書き方を比較していきたいと思えます。

### 一、フランクリンの人生、福澤の人生

フランクリンも福澤も経済的には恵まれない環境に生まれて育ちました。フランクリンの父親はイギリスから移民したボストンの蠟燭・石鹼製造業者でした。二度の結婚で、合計十七人の子供をもうけました。ベンジャミンは二度目の結婚で生まれた十人の子供のうち、八人目でした。職人の仕事がいくらうまくいってもこれだけ数の多い子供を食わせるのはつらかったに違いありません。実際、フランクリンは、自伝によれば、学校へは

二年通っただけで、ほとんど行けませんでした。一方、福澤は下級武士の家庭に生まれ、父親との早い死別のせいで、出身地の中津で母親、それから一人の兄と三人の姉たちと一緒に、経済的にはまったく余裕のない、貧しいといつていくらいの生活を送りました。漢学の学校に通い始めたのは『自伝』によると遅いほうで、同時に内職などをして、家計の助けをしていました。

フランクリンは十二才のとき兄のジェームスの印刷所で年季奉公を始めました。九年の契約でしたが、十七才の頃、兄の厳しい扱いに反発して、ボストンからフィラデルフィアへ逃げます。そこでキーマーという印刷業者に雇われ、新しいスタートを切ります。このフィラデルフィアへの脱走の場面は、どこか福澤が中津から長崎へ行き、長崎から大阪へ逃げていくエピソードに似ているように思います。若くても二人とも自分の意志で行動し、福澤の言葉を借りれば独立自尊を守ることに懸命でした。

フランクリンは学校へ行きませんでした。印刷所の仕事を通して本を多く読む機会があり、自分で読書の趣味を少しずつ育て、文章を書くことも好んで練習しました。そのうち彼の書いた手紙がペンシルヴェニア知事のキースの目に止まって、将来出世しそうな人として早いうちから評価されました。フランクリンは少しずつ印刷業者として独立しようと考えはじめ、十八才の時、機械などをかう目的でロンドンへ発ちます。一年半ほどロンドンの印刷所で働き、新しい本をたくさん読んで、最新技術を覚えて帰ってきます。フィラデルフィアでしばらく前の印刷業者の下にもどりますが、二十二才になってメレディスという人と共同で印刷業をはじめます。二年後にはメレディスと別れて単独で営業するようになります。ロンドンから帰ってきたフランクリンは、本業の傍ら二つの大きなプロジェクトを始めました。二十一才の時、読書好きの知り合いを集めて、ジャントクラ

ブというアソシエーションを結成しました。目的は情報交換とメンバーの相互的な教育でした。もう一つのプロジェクトは二十三才の時、新聞「ペンシルヴェニアガゼット」を買収経営したことでした。すでにボストンで、兄が経営していたニュー・イングラント新報という新聞にかかわり、兄に内証で *Silent Dogood* という筆名で原稿をよせたことがありました。福澤の場合は後のこととなりますが、明治時代になってから明六社結成と交詢社というクラブの結成(一八八〇)に続き、時事新報社を創立したこと(一八八二)が思い出されます。

教育を受けることができなかつたフランクリンは町の住民の教養レベルをあげることが大切だということを深く意識していました。四十五才の時、学校を創立しましたが、これがフィラデルフィア大学の前身です。その前に学術協会も設立しています。現在でも存在している *American Society of Philosophy* です。福澤にとつての学問の重要性や、彼が生涯慶應義塾に注いだ力を考えてみてください。そこに二人の間にもう一つのつながりがあることを認めていただけたらと思います。

フランクリンは商売を熱心に営み、成功を重ねていきますが、名前が知られるようになるにつれて、公共事業のためにその評判を利用しようとしてきます。二十五才のころ、後にフィラデルフィア図書館となる図書館を興したり、三十才になってユニオン消防組合の創設、四十一才のころ町の安全確保のための義勇軍の結成、その後には病院の建設に努力するなど、あらゆる分野で活躍しています。こういう活動に関しても、福澤の起業精神と自分自身の利益よりも社会に貢献しようとする態度を見れば、フランクリンと福澤との間に共通点があると思います。

私の国フランスではフランクリンは十八世紀にすでに科学者、それから外交官として名が広く世間に知られていました。有名なことですが、彼は

電氣を研究し、稲妻と電氣の同一性を発見し、証明しました。日常生活に役立つ道具もいろいろ作っています。少ない燃料で効率よく暖まるオーブンストープはその一つです。四十七才のときハーヴァード大学とエール大学の学位を贈られ、London Royal Society のコプリー賞をもらいました。五十才になった時には、イギリス学士院会員に選ばれました。福澤は科学的な発見はしませんでした。彼の近代科学に対する深い興味は絶えることはありませんでした。幕末時代に、『雷銃操法』を訳することにあたって、鉄砲の使い方を理解しようとして兵隊である義理の弟に来てもらって、実際に鉄砲をばらばらに分解してから再び組み立てたことがあります。その実験精神はそれほどフランクリンの凧揚げ実験と離れていないような気がします。後に福澤が北里柴三郎を援助したことは科学に対する彼の関心を十分示していると思います。

フランクリンは四十二才(二七四八)になって事業生活から引退しました。それから次第に政治家の道があるきだし、アメリカ建国の有志になっていきます。その年、フィラデルフィア市会議員となりました。四十八才の時フランスとの紛争問題をめぐってオールバニーで行われた植民地会議ではペンシルヴェニアを代表して、植民地の連合を主張します。それまではフランクリンはまだアメリカ植民地がイギリス帝国の一部であることに對して疑いを抱かず、違和感も持っていませんでした。しかしそのころから本国代表者が植民地に関して無知であることに苛立ち、課税をめぐって、領土のペン族、及び、それと並行して、イギリス本国代表と交渉しなければならぬ課題が多くなってきました。植民地連合という概念は当時理解されませんでした。のち独立宣言の際、似たような形で導入されました。

結局、オールバニー会議のあと植民地連合が成立し得なかったため、先住民とフランスとの紛争の際には植民地を守るということで、イギリスか

ら兵隊が送られ、そのためイギリスが税金を課せうとしました。その課税問題こそが植民地と本国との溝を深めていく要因になりました。一七五七年、五十二才になったフランクリンは再びロンドンへ渡って、州の代表としてペン領主と交渉をしました。五年間ほど滞在した後フィラデルフィアに戻り、五十八才の時ペンシルヴェニア州会議長に選ばれて、もう一度イギリスへ渡りました。それから十年以上ロンドンに残りましたが、その間は課税に関する政治論争に力を注いで、Stamp Act という印紙税法案の通過に反対し、それを撤廃させることに成功します。少しづつペンシルヴェニアのほかに、ジョージア、ニュージャージーとマサチューセッツの代表として責任を負うようになっていきました。六十九才でフィラデルフィアへ帰ったフランクリンは次の年、ちょうど七十才になった年ですが、一七七六年の独立宣言書起草委員に選ばれ、七月四日独立が宣言されました。十二月にフランクリンは使節の一員としてフランスへ赴き、一七七八年に米仏同盟条約に調印し、まもなく駐仏全權公使となりました。そして七十才の時には、対英講和条約(二七八三)に調印をしました。一七八五年にアメリカへ帰り、二年後、八十一才の時フィラデルフィアで行われた憲法会議にペンシルヴェニア代表として参加し、会議の終わりに、最終演説を行いました。そうしてフランクリンはアメリカ建国の有志のうち、独立宣言、米仏同盟条約、対英講和条約と憲法という四つの重要な文章に名前を刻まれた唯一の人になりました。

フランクリンの人生の後半はこうやって政治活動に捧げられましたが、それは確かに福澤の一個人の学者としての政府からの独立的な立場から見れば大いに違ってください。しかしながらこの二人を結ぶ糸がもう一本見出せません。なぜかといいますと、このフランクリンの政治家としての成果は、彼が海外旅行を好んで、自分から進んでヨーロッパへ向かうことがなけれ

ば、成り立たなかつたからです。痛風関節炎に悩まされる老人になつてもヨーロッパとアメリカの間の長くて危険な船旅を志すような人は他にいないでしょう。フランクリンは自伝でも書簡でもよく自分の旅好きについて述べていますが、それは必ずしも他のアメリカの政治家にあつたわけではありません。トマス・ジェファースンの例を挙げますと、最後の最後までロンドンへ行くことに抵抗があつて、講和条約の調印式のためにやっとフランクリン等の願ひに依じてヨーロッパへ渡つたのです。フランクリンは八十四年間の人生の中でほぼ二十七年を海外で過ごしました。それは十八才の時の旅行を除けば、五十才を過ぎてからの旅行でした。当時の人の平均寿命と海外旅行の事情を考えるとまことに珍しいことです。この海外体験こそがフランクリンの知識を豊富にし、その人格をつくりあげ、彼にイギリス、それからヨーロッパ全体とアメリカとの間の大切な仲介役を果たさせたのです。にもかかわらず、母国のアメリカで皮肉なことにこの海外体験の豊さが時としてフランクリンの忠誠が疑われる結果を招いたことさえありました。それというのも、フランクリンは同時代のアメリカ人から見ても、特別な位置を占めていたからに違いありません。彼は他の建国の有志たちに対して、常に自分の考え方を説明し、弁明しなければなりませんでした。

福澤も冒険精神と旅行への憧れから海を渡りました。初めて西洋を訪れたのは一八六〇年、咸臨丸に乗ってサン・フランシスコへ赴いた時です。その時福澤は、どうやって艦長の木村撰津守を説得したものかと思案しましたが、木村は福澤の立候補に大いに喜び、実は家来のものは誰もこんな大胆で危ない航海には出たがらなさと説明をしました。それだけ福澤の時代、それからフランクリンの頃こそ、海を渡るのには勇気の要ることであつて、普通の人なら中々しないことでした。福澤は西洋へ三回行っています

が、その三回とも明治維新前でした。西洋を実際に体験した数少ない日本人の一人になりました。福澤が言うように、幕末の日本では蘭学者は少数派であつて、宗教団体の一派(sect)に似た関係を持つていましたので、その常識の枠を超えた知識を得ていることはもちろん蘭学者の世界では尊敬を招きました。しかし他の「普通」の日本人は福澤をどのように見たかよくわかりませんが、理解のある見方とは限らなかつたことは確かでしょう。このように、ベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉の生涯において、いくつか共通点が見出せると思います。さて、これからは二人の考え方を比較してみたいと思います。そのためにそれぞれの自伝に現れる主な思想、つまり彼らの生きていく上での主な原則を示してみたいと思います。

## 二、福澤とフランクリンの思想

福澤もフランクリンも大変活躍の幅の広い、多様な面を持つ人でした。教育者でもあり、ジャーナリストでもあり、政治家でもあり、学者でもあつたからです。しかしその多忙な生活を支えた思想はしっかりしていたのです。根本的な原則が二人の中にはありました。

まず二人に共通する大きな特徴は合理主義ではないかと思ひます。それはいうまでもなく宗教に対する批評の中に一番強く現れています。『福翁自伝』の初めに出てくるシーンで、有名なエピソードがあります。お稲荷様の社を開け、その中に入っていた石をその辺で拾つたものに代えました。それからその社の前で祭をする人々をみて一人で笑つています。「幼少の時から神様が怖いだけの仏様が難有いだのいうことは一寸ともない。卜筮呪詛(うらないまじない)一切不信仰で、狐狸が付くというようなことは初めか

ら馬鹿にして少しも信じない」(『福翁自伝』二十三頁)。

フランクリンも宗教に対してはずっと懐疑的でした。「天啓は実際それ自身としては私にとってなんらの意味も持たず、ある種の行為は天啓によって禁じられているから悪いのではなく、あるいは命じられているから善いというのでもなく、そうではなくて、それらの行為は、あらゆる事情を考へ、本来われわれにとって有害であるから禁じられ、あるいは有益であるから命じられているのであろうと私は考えた。そしてこうした信念を得たおかげで、さらにまた恵み深い神の摂理のためか、守護天使の助けのためか、あるいは偶然にも環境に恵まれたせいか、またそれらすべてによつてか、私は遠く父の監督と訓育のもとを離れ、他人の間にあつてしばしば危ない境遇に陥つたにもかかわらず、危険の多い青年期を通じて、宗教心の欠如から当然考えられる意識的な下等下劣な不道徳や非行を一つも犯さないうですんだのである」(『フランクリン自伝』九十五頁)。

この合理的な態度は実用主義と功利主義に結びつく根本的な考え方です。福澤もフランクリンも自分の人生における判断、学問、社会、政治の課題に関しては実用的な立場を取り、功利主義を主張してきました。さきに引用したフランクリンの自伝のところでも宗教に関する考え方では、合理主義と実用主義と功利主義が混ざっていました。つまり宗教さえ人間に役に立つものであれば認めてもいいというような考え方です。

二人の考える教育では社会に必要な科目を中心にすえています。福澤の場合は、日本の近代化に欠かせない学科のリストを述べています。フランクリンの場合は市民社会の成立に必要な知識を優先にし、若い人々が職業の上で成功し、立身出世できるような学問を身につけてほしいと考えます。

彼らの性格や考え方を支配する独立精神と民主主義の概念は同じようにお互いに密接に結びついていると思います。民主主義は大人になって政治

事情の理解がある程度できてから二人にも大切なことになりましたが、その意識の深層にあるのは独立の精神であり、もしくは福澤が言う「独立自尊」ではないかと思えます。言うまでもなく、この特徴的な性格は彼らが幼い時、生まれた時から置かれた社会的な条件によると思えます。福澤は明らかに自分の生まれた社会を嫌い、「門閥制度は親の敵」といつて反感を表しています。

フランクリンの場合は若くして出世する必要性とその困難を感じ、社会制度に対する不愉快や反感を少しずつ抱いてくるように見えます。二人の政治的立場を考えると、一つ大きな違いがあると思われれます。福澤と違ってフランクリンは革命的な考え方に移行したといえるでしょう。福澤の場合、幕末及び明治初期に行われた政治の変化を望み、喜んだのに、年を取るにつれ、明治政府の国家主義政策を支持し、少なくともアジアに関する政治問題に対しては、革新精神を失っていききました。しかしそれには個人的性格の他に、その時代や国や歴史という環境の影響があります。フランクリンは一七〇六年に生まれ、イギリス帝国の植民地であつたアメリカで幼いころを過ごしてから、独立への歩みを経て、アメリカ憲法に調印したわずか三年後に死んでしまいました。それに比べ福澤は六十六年間の人生の中で、半分半分という割合で江戸時代と明治時代を体験しています。年を取ったフランクリンの自国の将来に対する気持ちは、福澤が『学問之すゝめ』で新政府の政策を喜んだ心持に似ていたでしょう。

### 三、自伝の書き方

フランクリンと福澤の自伝を読めば誰にでもわかるように、両著書の間には似たところが多くあります。まず、『福翁自伝』は、福澤は自分の記憶

のままに語って、人に筆記してもらいました。フランクリンの場合はそのような口述はしませんでしたが、息子のウイリアムに宛てた手紙という形で書いています。(生涯の最後のころのみ、たいへん弱っていたので、孫に語り、筆記してもらった部分があります)。こうして、両者の自伝は口語で書かれ、とても読みやすい生き生きとした文章になりました。二人とも文章を書くことに関しては深く考え、一生、できるかぎり簡明な文章が書けるように努力したようです。福澤は緒方洪庵の適塾にいた頃から、翻訳の仕事に当たり、平易な文章を書く技術を身につけました(注)。一方、フランクリンは、バニアンの『天路歷程』(Pilgrim's Progress, by Bunyan)についてその平易な文章を褒めています(『フランクリン自伝』二十七頁)。彼はまた、同様の文章の簡明さをデフォー(Dafoe)の著書で見出して、すばらしいと書いています。

フランクリンは演説に自信がありませんでしたが、文章はかなり練っていたようです。福澤と同様に、多くの読者を惹きつけてアメリカ人の平均的教養レベルを上げようとしていました。ある時フランクリンは新しいスペリングシステムを試みました。英語の書きにくいことを批難し、新しい綴り方を模索していたのです。結果としてはあまりいい方法は見つからなかったようですが、福澤の中心課題である言葉の近代化と似たような考え方だったといえるでしょう。

それと関連しますが、フランクリンも福澤も雄弁術に関心を持ち、それぞれ自伝の中で人と論争する場合のいわゆるレトリックに関して独自の立場を述べています。フランクリンの場合は最初ソクラテスの論理学を学び、それを適用しようとした。フランクリンが言う「いきなり人の説に反対したり、頑固に自説を主張したりする今までのやり方を止め、この方法に従って謙遜な態度で物を尋ね、物を疑うといった風を装うことにきめ

た。(中略)「私は何年かの間この方法を用いつづけたが、やがてだんだんに止めて行き、ただ謙遜な遠慮がちな言葉で自分の考えを述べる習慣だけはこれを残し、異論が起こりそうに思えることを言い出す時には、「きつ」とか、「疑いもなく」とか、その他意見に断定的な調子を与える言葉は一切使わぬようにし、そのかわりに、「私はこうこうではないかと思う」とか、「私にはこう思われる」とか、「これこれの理由でこう思う、ああ思う」とか「多分そうでしょう」とか、「私が間違っていないかと思う」とか言うようにしたが、この習慣は、自分が計画を立ててそれを推し進めて行くにあたり、自分の考えを十分に人に呑みこませてその賛成をうる必要があつた場合に少なからず役に立ったように思う」(『フランクリン自伝』二十八〜二十九頁)。

福澤の場合はやはり性格でしょうが、人と喧嘩することを嫌い、自分の本来思っていることを他人に言わず、むしろ相手に話をさせて、その興奮する様子を見て喜ぶところがありました。後の時事新報の社説を読んでも、福澤が一つの課題に関して違う意見を相次いで述べることに気がつきます。時期、環境、政治状況、それに関わる要因がもちろんたくさんありますが、福澤が好んだのは人を驚かせておいて、反応を起こさせることだったのでないでしょうか。

フランクリンも福澤もこのように議論を進める方法に力を入れていました。そうしているうちに人を笑わせる術も熟練したらしく、両方の自伝はユーモアに溢れています。面白いことに二人のユーモアは似ているのです。一例をあげると、フランクリンがフィラデルフィアの印刷業者キーマーという人のところで働き、同居していたころ、その大食漢のキーマーを肉を食べないような生活に導こうとしたところ、三ヶ月後に彼はそれに耐えられないで、招待客のために用意した焼き豚を一人でひそかに食べてし

まつたことなどがあります。フランクリンはその場面を描いています。これは福澤が緒方洪庵の適塾で同級生や後輩たちにした悪戯に似ていると思います。また、先程申し上げた宗教の考え方においても、それを説明するときの二人の皮肉は大変似ていると思います。

二人の自伝にはもう一つ大切な共通点があります。両方とも肯定的な自伝であることです。福澤にしる、フランクリンにしる、自分の生きた人生を振り返って満足する見方をしています。失策、失敗など認めても、大きな悔恨は残っていないような印象を与えます。これは自伝文学の中で特殊なタイプのものであり、場合によっては、自慢に満ちた書き方で、読者をいらいらさせてしまう結果を招くかも知れません。しかし軽い調子や積極的な精神を示唆する書き方で、ある意味で刺激的な影響を及ぼすことは否定できないでしょう。

また両自伝には構成の欠点が見出されます。福澤の場合、若い頃(明治維新まで)を中心に明治維新の後のことにはほとんど触れず、雑記、または一身一家経済の由来といういい方でさまざまテーマを最後にまぜていきます。フランクリンの方は、自伝を書き始めたのはイギリスにいた一七七一年のことですが、一時中断し、また書きはじめ、全体で四度もの中断があつたので、やはりバランスが十分取れていない面もあります。福澤の場合、自伝がある程度完成させてまもなく病気になるので、もう少し生きてくれれば、足りないところを補って完成させただろうということには考えられます。フランクリンは最後まで書いていましたが、人生の後半の忙しさと健康が優れていなかったことを思うと、重要な歴史的事件に関しては十分に詳しく書けなかったことは理解できます。

## 結び

この二人の偉人の自伝を比べて、いくつか共通点を明らかにしましたが、一つ大きな疑問が残っています。それは福澤がどのくらいフランクリンに影響されたかということです。全集を通してみると、フランクリンに関する指摘や引用文も多いのですが、フランクリン自伝に関するところは見当たらないのです。福澤はフランクリンを尊敬し、その科学者として、政治家・思想家としての実績を詳しく知っていたことは確かですが、自伝を読んだかどうかは不明です。明治時代にフランクリンの自伝は広く読まれ、和訳が出るまでは英語の勉強にもよく使われたそうです。ですから、福澤もそれを目にした可能性が十分あります。それからもう一つ注目しなければならぬことは、フランクリンの自伝の和訳がいくつか明治期に出ましたが、そのうちの一つ(全文和訳)が出た明治三一年(『フランクリン自伝』解説(松本慎一による)三〇三頁参照)が、『福翁自伝』がはじめて時事新報に連載された年に他ならないことです。また、フランクリンが自伝を書き始めたのは一七七一年、六十五才のときです。福澤が自伝を速記させることを思い立ったのは一八九七年(明治三十年)のことで、当時六十二才でした。伝記に手をつけた時期が年齢的に近いのは、偶然なのか、実際に関連があつたのかわかりませんが、そこに少なくとも二人の間のもう一つの共通点を見出してもよろしいでしょう。

最後になりましたが、フランクリンと福澤の自伝の解釈に当たっては、一つ大事なことを忘れていけないと思います。明治時代の日本人がフランクリン自伝を読んだ時の関心は、むしろ立身出世の精神にありました。アメリカでも、フランクリンは産業革命の影響で、革新政治家としてよりも、

道徳・儉約の厳しい起業家として十九世紀の半ばから再評価され、一種の

理想像として祭り上げられました。福澤も政治家としてのフランクリンより起業家や科学者としての彼に目を向けていました。

しかし、今二人の自伝を読むと、その時代、その国に大きな影響を与えた優れた人物の個性とともに、普遍的な人間性が浮かんできます。『福翁自伝』も『フランクリン自伝』も世界中で読まれ、人類の文明開化の証として再び解釈されるべきだと思います。

(注) これについては『福翁自伝』よりも、ほぼ同時期に福澤が書いた全集緒言が詳しい。『福澤論吉全集』第一巻、または『福澤著作集』第十二巻をご参照願いたい。

(二〇〇四年一〇月二日九州大学における講演)

(参考文献)

平川祐弘『フランクリンと福澤論吉 進歩がまだ希望であった頃』新潮社、

一九八四年

『福澤論吉全集』全二十一巻、岩波書店、一九五八〜一九六四年

『福澤著作集』全十二巻、慶応義塾大学出版会、二〇〇二〜二〇〇三年

福澤論吉『福翁自伝』岩波文庫、一九八〇年

『フランクリン自伝』松本慎一・西川正身訳、岩波文庫、一九九七年

FRANKLIN Benjamin, *The Autobiography and Other Writings*, Penguin Classics, 1986.

ISAACSON Walter, *Benjamin Franklin An American Life*, New York, Simon and Schuster Paperbacks, 2003.

WOOD Gordon, *The Radicalism of the American Revolution*, First

Vintage Books Edition, 1993.

WOOD Gordon, *The Americanization of Benjamin Franklin*, Penguin Press, 2004.